

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

地域共生社会を考える若者のために夏の特別講座

いつのまにやら〇〇〇〇〇〇

20年先を見据えて、ただの顔見知りで終わらせずに、気にかけて合う関係へ、さらには手を差し伸べ合える関係へと関係性を広げ、深めていくことが必要です。自分たちが暮らす「甲賀市」の地域共生社会を対話を通じてともに考え、その実現に向けて緩やかに動き出せる若者を一人でも多く育むために、本市の40歳未満の若者向けに、7月25日から毎週金曜日の夜、市役所別館にて全6回の講座を開催しています。（法人連携 シナジールリンク共催）やってみてはじめて生まれる価値に着目し、参加者28名のそれぞれの「いつのまにやら〇〇〇〇」を発見する夏の特別講座です。「若者にこのメッセージは届くか！」熱い金曜の夜が続くなか、前半3回の内容を報告します。



▲講座の終わりに毎回記念撮影、上は参加者が最多であった2回目の様子(R7.8.2)



▲コミュニティコーピング体験会を通じた初回の交流の様子(R7.7.25)

第1回 コミュニティコーピング体験会 7/25

大学生、会社員、学校の先生、福祉の仕事に就いている人、住まいは甲賀市じやなけど甲賀市に愛着がある人など、みんなが「はじめまして」の関係。司会者は、メンターの山本尚路さんが担当してくれました。大切なことは、「いつのまにやら思考」（図1）。自分のベースでゆっくり行こうね、というもの。「思いの共有のための「ワカモノ撮影隊」による写真のシェア、SNSの活用、もちろんルールの確認も忘れない」等、柔らかさのなかにも丁寧な運営に職員たちが教えられ、支えられながらスタートしました。

「超高齢社会における孤立を防ぐ コミュニティコーピング体験会」では、ボードゲームで盛り上がったあとの意見交換。お互い初回にしてすっきり打ち解けた様子の受講生たちでした。メンターとは、メンバーの成長をサポートするもの

本号の内容
・いつのまにやら〇〇〇〇〇〇
若者講座特集1

・重層物語スィートメモリーズ

図1

いつのまにやら思考のコツ

- 対話を意識していきましょう
特別講座では、仲間の意見を大切にしましょう。同時に自分の意見も大切に。多様な価値観や意見を受け入れながら、自分の中の「大切」を育てていきましょう。
- 変化を楽しむ
各自、いろんな想いを持ってこの特別講座に参加しています。6回の講座を通じて、変わっていく自分や仲間の姿を楽しんでみてください。
- なんども立ち止まろう
いつのまにやら思考の最大のポイントは、急がないこと。なにか違和感を感じたら、立ち止まったり、仲間に相談したりしながらまた進んでみましょう。

あなたの「いつのまにやら〇〇〇〇」が見つかりますように。



▲3人のメンター



▲差し入れ
サンドイッチ

▲司会運営担当
山本尚路さん

第2回 笑察カフェ 8/1

「仲間のことをもう少し知りたいな」の思いをお手伝いする今回の手法として、「笑察カフェ」を用いました。

自分の行動を振り返り、自身の価値観に気づき、成長するのが省察。
今回はグループのなかで、「私のオシ（推し）」を紹介する対話でおしゃべりしてもらいました。「私のオシは〇〇」を具体的に話す人、聞く人、そし

第3回 講義「今こそ若者の力を」 8/8



▲突然のグラレコ
提案の岩崎先生



▲差し入れクッキー

四日市大学名誉教授の岩崎恭典先生を講師に「地域での実践報告」今こそ若者の力を」と



▲グラレコに奮闘する3人のメンター

※グラフィックレコード(グラレコ)とはプレゼン内容を絵や図のグラフィックにしてわかりやすく伝える手法

て「詳しく教えあう」短い時間の中で、笑いながら仲間を知り合う時間となりました。「省察」の「省」を「笑」と充てています。

「詳しく教えあう」短い時間の中で、笑いながら仲間を知り合う時間となりました。「省察」の「省」を「笑」と充てています。

2つのセッションに分け、データに基づき、「これからは、負担を分担していかないとけない時代」「一人ひとりが意識的に行動をしていかないとけない」という「主語」をつけることが重要だ」との講義内容でした。

岩崎先生の横では、3人の若手メンターがグラレコ（※）に挑戦！そのおかげもあり、場も和み、やや難しめの講義内容がスツと入ってくるものでした。

受講者が地域で活動する時のイメージが掴めたのではないかと思います。

差し入れという形での参加・応援

毎回、有志からの差し入れが届きますが、3回目「おにぎり」を差し入れていただいたエリカさんからのメッセージ(抜粋)を紹介します。

本日お持ちしたのは、「タッチデランチ」の定番メニュー「鮎たっぷり炊き込みご飯おにぎり」です。

今、甲賀市に子ども支援や高齢者支援はたくさんありますが若者への支援や活動の場は驚くほど少ないと私はずっとそのことを疑問に感じていました。

そんな中、山本さんのInstagramでの活動を知り、深く感動しました。「ぜひ応援させてほしい」という思いで少しでもおなかの足しになればと思い、こころをこめておにぎりを作りました。

私自身、若いころは一生懸命働いても、どこか報われないような感覚がありました。それは、きつこうした集える場所がなかったからだと思います。これからの甲賀市はどの世代も置いてきぼりにならないまちづくりが大切になって来ると思います。

このような機会をいただけたことに感謝します。



上記記事は、3名の若手メンター（山本君、ゆうきちゃん、キョロちゃん）からいただいた情報から編集しました。

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかという気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ 2

今、私は隣の家にいて、薄暗くて狭い二階の廊下で身を潜め、静かにその時を待っている。毎晩声が漏れ聞こえてきた小窓は、私のすぐ頭の上にある。もうすぐ3時。嫌な汗がひとすじ背中をつたう。携帯の光が漏れぬように手でかばうようにして時間を確かめる。

(一人暮らしの高齢者を狙った強盗犯はこんな気分なのだろうか)

ずいぶん物騒なことを考えている。

それにしても、なぜこうなった？ 回避するところはそんなに難しいことではなかったはずだ。

我ながら理解に苦しむところだが、私には、松田民生委員の考えた計画を、「バカバカしい」と葬り去ることがどうしてもできなかったのだ。

【お悩み相談解決プラン ～隣人愛2025～】

▼立案者、松田寿雄(民生委員二期目)

▼相談者、北島丈志くん

▼相談の中心

相談者の隣家に住む松田さんとは、毎晩23時になると幻覚症状が現れ、数年前に他界したはずの夫に対して大声で話しかけるらしい。そのようなことは一年以上前から始まり、北島家は松田さんの声に悩まされ続けている。

▼松田の解説

夜間に出現する幻覚症状から、松田さんはレビー小体型認知症と考えられる。その場合、「そこには誰もいませんよ」などと幻覚を否定するような態度は早計というものだろう。「一層のこと、透子さんの目に映るものを肯定し、大いに幻覚症状に寄り添おうではないか。」

▼プランの内容

23時前に終廊に忍び込み、北島くんが現場となる二階の廊下にて待機。亡くなったご主人に成り代わって、松田さんの呼びかけに答え、対話することで彼女の積年の想いを果たす機会を出す。

松田さんは一階のダイニングにて状況を見守り必要な指示を出す。また、自治会長の大村氏には音響担当としてご参画いただき、懐かしのナンバーでクワイマックスを迎える。

▼寿雄のワンポイント

幸運なことに、在りし日のご主人と北島くんはとてもよく似ている。もう少し肩が太ければ瓜二つと言ってもいい。そこで、肩を太くする化粧を施せば、このプランは必ず成功するであろう。

「どうや北島君、なかなかええやつ。」

「これは、いけませんね」

「えっ、なんでや、どのあたりが気に入らんのか」

「全部です。まず不法侵入になりますよ。それに、とにかく決めつけがものすごいです」

「それやったら、肩の太さを」

「違います。そいつのじゃないです。むしろそれはマシなくらいです」

松田さんから初めてプランを見せられた時は、もはやこの計画が実現することはあり得ないだろうと、逆に安堵したくらいだった。しかし、私は今、肩を太くして、隣家宅二階で中腰になっている。想定外があったとすれば、松田さんが対話のできる人だったことだろう。まった

くの独りよがり、突っ走るタイプだと思っていたがそうではなかった。我が子ほどに年の離れた若輩者の、しかも福祉分野に明るくもない素人同然の私の意見に耳を傾けてくれるのだ。ただ対話といっても、多様性の尊重」と表現するような滑らかな調子はなく、かなり無骨な感じがあったし、易々と相手の意見を聞き従わない往生際の悪さもあった。

それでも、相手を論破することを目的するような薄っぺらいものではなかったのが救いだろ。とにかく、松田さんと私は、割と真剣に話合いを重ね、紆余曲折を経て、概ね3つの修正点にまで絞り込むことができたのだ。

①松田さん本人とご家族に対して、プランの内容を説明し、家にお邪魔することを含めてしっかりと同意を得ること。

②勝手な判断をするのではなく、福祉・医療の公的機関に相談すること。

③プライバシーを守ること。例えば、勝手に自治会長が音響担当として加わるようなマネは厳に慎むこと。

しっかりと話し込んだ分だけ、その後の松田民生委員の動きは迷いなく淀みなく行動を伴い、プランの実現に向けて前へ前へと進んでいった。

まず一つ目の本人と家族への説明及び同意については、松田さんが松田さん宅を訪問し、実際にあのプランを本人に見てもらって快諾を得たと話していた。

「松田さんは理解が早いわ。ほんまに勘がええ人やで」

松田さんはそう言って喜んでた。

理解が早くて勘の鋭い松田さんが、松田プラン上では「認知症高齢者」となっている。この大いなる矛盾を、なぜあの人はスルーできるのだろう。さらに言えば、一層のこと、わけのわからぬプランなんぞは横に置いて、そのままの相談内容を、つまり23時の話し声について聞いてくれればよいではないか。

しかし私は、かなり疲れがきていたこともあって、もはや松田さんに突っ込みを入れる元気がなかったのだ。それでも県外で暮らす娘さんへの説明だけは、抜かりなく丁寧にやっておきたいポイントだった。とにかくこれ以上の近隣トラブルは御免だ。

松田さんに無理をお願いして、私の目の前で、娘に連絡してもらったのだ。松田さんはいつもの調子で、自信たっぷりにプランを説明していたが、難航している様子が伝わってくる。まあ当然だろうとしばらくは黙って聞いていたが、限界がきた。

「北島くんにはメイクを施しますのや。そやから紅は引きませんよ。肩をちょっとぼかし」と、彼が発した瞬間、私は携帯を奪い取っていた。

改めて事の始まりから説明しなおし、「申し訳ございませんが」と前置きをしてから、松田プランを驚くほど饒舌に代弁していたのだ。

「娘さんからもオッケーをもらいましたよ」

電話を切って、私は誇らしげに松田さんにそう言った。人気のない団地の片隅で、私たちはハイタッチをした。



バックナンバーはこちらから↓

